

雪国の植物 ユキツバキ2

樹の大きさ

石 沢 進

ユキツバキは低木であることが形態的な特徴の一つにあげられる。その特徴はユキツバキとヤブツバキを同じ条件で栽培した場合でも明らかで、ユキツバキの樹高の伸長はヤブツバキに比較して低く、ヤブツバキのように樹高は高くない。それに加えてユキツバキは多雪という環境条件の地域に分布することもあって雪が樹高に与える影響も大きい。最近の野外調査から見聞した2・3の事例を紹介したい。

ユキツバキの立ち枯れ (写真1)

佐渡では花の咲かないツバキがある、と現地の人のお話を聞き、大変興味深く思った。どのような状況で花が咲かないのか伺ったところ、樹の高さが50cm未満で大きなものがなく、地表近くに枝葉が広がっているとのことである。遺伝的に花の咲かない個体が群生している可能性が、全くないわけではないが、恐らく環境条件によって生じたユキツバキの生態の一面であろうとみている。

ユキツバキは冬積雪が少なく、雪上にでた枝葉は枯死することを観察している。佐渡のユキツバキの群生地を春訪れた時に、しばしばユキツバキの枝葉が枯死しているのに出会う。本年3月にも佐渡の群生地で見られた。また、積雪量の少ない年に、地上の枝葉がほとんど枯死した事実も確認している。毎年雪の少ない立地では、雪上の枝葉が枯死する率が高い。ユキツバキの枝葉が地上低く繁茂している所は、そのような被害を受けやすい立地条件であり、大きな樹に生長しない。大きくなって雪の上にとると枯死するといった繰返しで多数の花の咲く大きさに達しない。花が咲かない個体が群落の主体を占め、結果として花が稀なので、みかけでは“花が咲かない”ことにつながるものと思われる。

佐渡だけでなく、ユキツバキが群落の中で立ち枯れになっているのを見かける。多くの場合、背高く生長した樹に枯れが目立つ。そして、多雪地帯よりも海岸に近くて低海拔の地域や内陸の分布限界地などでそのような枯れ樹に出会う。厳冬の寒風に弱い植物である。

ユキツバキの新芽の霜害 (写真2)

ここ数年気候の安定しない年が続いているようである。積雪量の少ない年で、春に気温が上昇し、植物の芽が伸び出した後に気温が低く、0度以下になると新芽が霜の害を受けることがある。ユキツバキも例外でなく、被害を受ける。ユキツバキは平均気温が摂氏12度以上になると新しい芽が動き出すことが確かめられている。春4月下旬に気温が上昇してその温度に達し、5月中旬に0度以下になる日があると折角伸長した芽が被害を受けることになる。今年(1991)の5月11日鳥坂山に登山した際、新芽の一部が枯れているのに出会った。恐らく5月上旬の低温による被害と思われる。天候の不順の

年に注意深く見てみると、そのような被害のあとを見ることが出来る。例年多くの雪が降る地域で、積雪量の少ない年があると大きな被害を受けることがある。特に、内陸のユキツバキの限界地でそのような機会に出会うことがある。被害が大きくと、それが生じた地域では、木の大きさにも関連するし、極端な場合にはユキツバキの生存にも関わることになる。

ユキツバキの老木と寿命

胎内流域ではユキツバキとしては老木のものがみられる。ここは、多雪地帯であってブナの自然林の下に生育し、次のように太い幹に生長している。

ユキツバキの根元幹周

13.5, 14.5, 14.6, 15.3, 17.5, 17.5, 17.5, 19.2, 21.8, 23.3, 23.6, 24.0, 25.0, 25.2, 27.8 (単位 cm)

調査場所: 胎内ダム予定地付近, 個体数: 15

1989年11月5日 笹川 通博氏調査

付近のブナの胸高幹周 233cm (直径77cm)

上記の幹周の年輪は数えていないが、以前の調査からこの太さのものでも100年も超えるものは殆どない。毎年雪に押されて樹は斜上し、根元は次第に土壤中に埋まる。埋もれた幹から発根し、不定芽が発芽する。長年の間に地中の幹が枯死すると独立した個体になる。つまり、無性的に栄養繁殖する。群落の中では100年を超える老木がほとんど見られない。



写真1 冬期雪上に露出したユキツバキの枝葉の枯死 (佐渡1991年3月26日)



写真2 霜害を受けたユキツバキの新芽 (鳥坂山1991年5月11日)